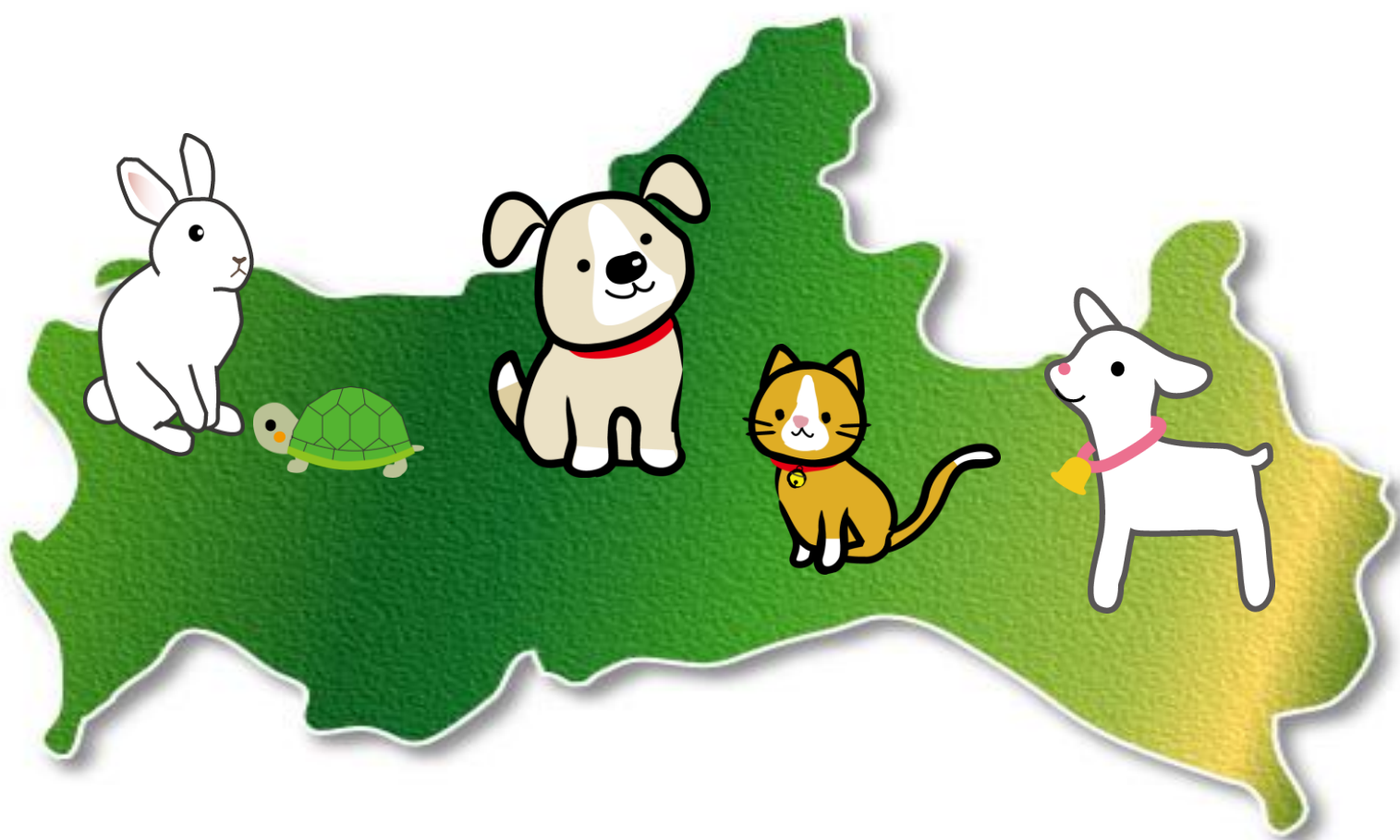


動物由来感染症ハンドブック

(動物からうつる病気があります)



令和8年2月

山口県環境生活部生活衛生課

目 次

I	はじめに	1
	動物由来感染症とは	
II	山口県の調査結果	
1	イヌの調査結果	2
2	ネコの調査結果	4
3	ウシの調査結果	6
	動物の各カテゴリーと動物由来感染症との関連	
	動物由来感染症の病原体	
4	鳥類の調査結果	8
	動物由来感染症に特に注意を要する人	
5	爬虫類の調査結果	10
6	げっ歯類等の調査結果	11
7	ふれあい動物の調査結果	12
	日本であったこんな話	
III	動物由来感染症の予防対策	14
IV	主な動物由来感染症	
1	ペット動物等から人に感染する（又は感染の疑いがある）病気	17
2	節足動物等から人に感染する（又は感染の疑いがある）病気	20

I はじめに

動物は私達人間にとってかけがえのない存在です。

家庭ではイヌ、ネコなど哺乳類をはじめとして、げっ歯類（ネズミ、ハムスター、リス等）、鳥類、は虫類等多種多様な動物が飼育されるようになり、これらの動物は家族の一員として、室内において生活することが増えています。

また、動物園等では、動物と直接ふれあう施設が設けられ、情操教育やレクリエーションの場として重要な地位を占めています。

このように、ヒトと動物の距離が縮まることは利点がある一方で、動物が持っている病原体がヒトに感染する、いわゆる動物由来感染症に罹患する可能性がこれまでよりも高まることにもなります。

こうした状況の中、県では、平成 12 年度からペット動物等の病原体や抗体等の保有状況を調査し、県民の皆様は動物由来感染症の保有状況や動物との正しい接し方を理解していただくため、パンフレットやホームページ等で情報提供してきたところです。

このたび、より一層、動物由来感染症を理解していただき、動物の衛生管理の徹底や動物との適切な接し方の参考としていただけるよう、これまでの結果をより分かりやすく、ハンドブックとしてとりまとめました。

動物由来感染症の正しい理解と、動物たちと適切につきあっていくための参考になると幸いです。



動物由来感染症とは

動物からヒトに感染する病気の総称です。

「動物由来感染症」には、ヒトも動物も重症になるもの、動物は無症状でヒトが重症になるもの等、病原体によってさまざまなものがあります。

世界では従来知られていなかったたくさんの新しい感染症が次々と見つかっていますが、その多くが動物由来感染症であることが分かってきました。

動物由来感染症は、世界保健機関（WHO）で把握されているだけでも 200 種類以上あります。

Ⅱ 山口県の調査結果

1 イヌの調査結果

: 山口県で陽性が確認されたもの

検査対象		感染症名	検査方法	実施年度	陽性/ 検査件数	検出率%
イヌ	口腔/ 病巣部 /咽頭	ジフテリア毒素産生性 コリネバクテリウム・ウルセランス 感染症	病原体分離	H19～21	0/116	0.0%
			遺伝子検出		0/111	0.0%
	口腔	パストツレラ症	細菌培養	H14～15	141/219	64.4%
		カプノサイトファーガ感染症	病原体分離	H22～24	72/171	42.1%
			遺伝子検出	H22～24	149/171	87.1%
	尿	レプトスピラ症	鞭毛遺伝子 (<i>flaB</i>) 検出	H21～22	0/ 85	0.0%
	糞便	サルモネラ症	細菌培養	H12～13	1/353	0.3%
		腸管出血性大腸菌感染症	細菌培養 ベロ毒素遺 伝子検出	H12～13	0/353	0.0%
		エルシニア感染症	細菌培養	H12～13	2/353	0.6%
		カンピロバクター症	細菌培養	H12～13	1/149	0.7%
		クリプトスポリジウム症	病原体検出	H14～16	11/264	4.2%
		ジアルジア症	病原体検出	H14～16	3/264	1.1%
	血清	レプトスピラ症	抗体検出	H12	(77/ 90)	ワクチン接種 の影響により 確認できない
		トキソプラズマ症	抗体検出	H12～15	17/322	5.3%
		Q熱	抗体検出	H16～18	1/162	0.6%
		イヌブルセラ症	抗体検出	H17～19	1/131	0.8%
		E型肝炎	病原体遺伝 子検出	H17～19	0/131	0.0%
		猫ひっかき病	抗体検出	H13～15	31/322	9.6%
		重症熱性血小板減少症候群 (SFTS)	抗体検出	R1 ～ 6	6/178	3.4%
	血液	レプトスピラ症	鞭毛遺伝子 (<i>flaB</i>) 検出	H23	0/ 30	0.0%
		猫ひっかき病	病原体検出	H13～15	0/221	0.0%

注意を要する感染症（イヌ）

咬傷・掻傷による感染

パストレラ症

〈症状〉

- ・受傷部位の炎症（蜂窩織炎※¹）、関節炎、骨髄炎
- ・重症例では、敗血症※²や骨髄炎により死亡することもある

カプノサイトファーガ感染症

〈症状〉

- ・発熱、倦怠感、腹痛、吐き気、頭痛
- ・重症例では、敗血症※²や髄膜炎により死亡することもある

重症熱性血小板減少症候群（SFTS）

〈症状〉

- ・6日から2週間の潜伏期を経て、発熱、消化器症状（食欲低下、嘔吐、下痢等）を発症
- ・罹患したイヌから感染するおそれがある

咬傷・掻傷、ノミの媒介による感染

猫ひっかき病※³

〈症状〉

- ・受傷部位の発疹、潰瘍
- ・受傷部位の所属リンパ節の腫脹、疼痛
- ・発熱、悪寒、食欲不振、頭痛
- ・まれに合併症として、脳症、髄膜炎、肝脾膿瘍※⁴が起きることがある

糞便を介した感染

クリプトスポリジウム症

ジアルジア症

〈症状〉

- ・腹痛、下痢、嘔吐などの食中毒症状

※1 蜂窩織炎：皮膚の深いところから皮下脂肪組織にかけておこる化膿性炎症

※2 敗血症：血液中に病原体が入り込み、重篤な全身症状を引き起こす病気

※3 猫ひっかき病：主にネコのひっかき傷や咬傷から感染するが、原因菌である *Bartonella henselae* をイヌも保菌しており、注意が必要

※4 膿瘍：炎症により局所的に組織が融解して膿がたまった状態

予防方法

- 口移しで餌を与えたり、食器を共用するなど、動物との過剰なふれあいを避ける。
- 動物と接触した際は、手洗いを励行する。
- 噛まれたり、ひっかかれたりしないように注意する。
- 万一、咬傷や掻傷を受けた場合は、傷口を石鹸でよく洗い、医療機関を受診する。
- 動物の適正飼養管理（ノミ、ダニの駆除等）を実施する。
- 動物の糞便を適切に処理する。



□ : 山口県で陽性が確認されたもの

2 ネコの調査結果

検査対象		感染症名	検査方法	実施年度	陽性／ 検査件数	検出率%
ネ コ	口腔/ 病巣部 /咽頭	ジフテリア毒素産生性 コリネバクテリウム・ウルセランス 感染症	病原体分離	H19～21 H28	0/ 186	0.0%
			遺伝子検出	H30～R1	0/ 180	0.0%
	口腔	パストツレラ症	細菌培養	H14～15	64/ 81	79.0%
		カプノサイトファーガ感染症	病原体分離	H22～24	42/128	32.8%
			遺伝子検出	H22～24	107/128	83.6%
		重症熱性血小板減少症候群 (SFTS)	遺伝子検出	R 2～ 7	2/147	1.4%
	糞便	サルモネラ症	細菌培養	H12～13	0/154	0.0%
		腸管出血性大腸菌感染症	細菌培養 ベロ毒素遺 伝子検出	H12～13	0/154	0.0%
		エルシニア感染症	細菌培養	H12～13	0/154	0.0%
		カンピロバクター症	細菌培養	H12～13	1/ 57	1.8%
		クリプトスポリジウム症	病原体検出	H14～16	0/ 86	0.0%
		ジアルジア症	病原体検出	H14～16	4/ 86	4.7%
		重症熱性血小板減少症候群 (SFTS)	遺伝子検出	R 4～ 7	1/117	0.9%
	血清	トキソプラズマ症	抗体検出	H12～15	4/188	2.1%
		Q熱	抗体検出	H16～18	1/ 92	1.1%
		イヌブルセラ症	抗体検出	H17～19	1/ 33	3.0%
		E型肝炎	病原体遺伝 子検出	H17～19	0/ 90	0.0%
		猫ひっかき病	抗体検出	H13～15	30/128	23.4%
	血液	猫ひっかき病	病原体検出	H13～15	16/ 79	20.3%

注意を要する感染症（ネコ）

咬傷・搔傷による感染

パスツレラ症

〈症状〉

- ・受傷部位の炎症（蜂窩織炎※1）、関節炎、骨髓炎
- ・重症例では、敗血症※2や骨髓炎により死亡することもある

カプノサイトファーガ感染症

〈症状〉

- ・発熱、倦怠感、腹痛、吐き気、頭痛
- ・重症例では敗血症※2や髄膜炎により死亡することもある

重症熱性血小板減少症候群（SFTS）

〈症状〉

- ・6日から2週間の潜伏期を経て、発熱、消化器症状（食欲低下、嘔吐、下痢等）を発症
- ・罹患したネコから感染するおそれがある

糞便を介した感染

トキソプラズマ症

〈症状〉

[後天性感染]

- ・多くは不顕性感染※4だが、リンパ節炎、眼の網脈絡膜炎を発症することがある

[先天性感染]

- ・母体が妊娠中に初感染した場合、胎盤を介して胎児に感染し、胎児に流産、精神又は運動障害、脳内石灰化、水頭症※5を起こすことがある



咬傷・搔傷、ノミの媒介による感染

猫ひっかき病

〈症状〉

- ・受傷部位の発疹、潰瘍
- ・受傷部位の所属リンパ節の腫脹、疼痛
- ・発熱、悪寒、食欲不振、頭痛
- ・まれに合併症として、脳症、髄膜炎、肝脾腫瘍※3が起きることがある



ジアルジア症

〈症状〉

- ・腹痛、下痢、嘔吐などの食中毒症状

※1 蜂窩織炎：皮膚の深いところから皮下脂肪組織にかけておこる化膿性炎症

※2 敗血症：血液中に病原体が入り込み、重篤な全身症状を引き起こす病気

※3 膿瘍：炎症により局部的に組織が融解して膿がたまった状態

※4 不顕性感染：感染しているが症状を示さない感染様式

※5 水頭症：頭蓋内に脳脊髄液が過量にたまり脳が圧迫を受けたり頭蓋内の圧が高くなる病気

予防方法

- 屋内飼育を徹底する。
- 口移しで餌を与えたり、食器を共用するなど、動物との過剰なふれあいを避ける。
- 動物と接触した際は、手洗いを励行する。
- 咬まれたり、ひっかかれたりしないように注意する。
- 万一、咬傷や搔傷を受けた場合は、傷口を石鹸でよく洗い医療機関を受診する。
- 動物の適正飼養管理（ノミ、ダニの駆除等）を実施する。
- 動物の糞便を適切に処理する。



 : 山口県で陽性が確認されたもの

3 ウシの調査結果

検査対象		感染症名	検査方法	実施年度	陽性/ 検査件数	検出率 %
ウシ※	口腔	腸管出血性大腸菌感染症	細菌培養	H18～21	24/200	12.0%
			ベロ毒素 遺伝子検出		42/150	28.0%
	体表		細菌培養	H18	0/ 50	0.0%

※ 生後1か月程度の子牛

動物の各カテゴリーと動物由来感染症との関連

動物を生活環境により分類した場合、それぞれのカテゴリー（群）と動物由来感染症の関連性が見いだせます。

カテゴリー（群）	動物由来感染症との関連
ペット（伴侶動物）	イヌやネコもヒトにうつる病原体を持っている。不適切な触れ合い等によりまれに感染する。その他、鳥やウサギ、爬虫類などどのようなペットもヒトにうつる病原体を持っている可能性がある。
野生動物	どのような病原体を持っているか不明なことが多い。 ヒトにとって重篤な感染症の病原体を持っていることもある。
家畜	畜産物が食中毒や感染症の原因となる場合がある。 衛生対策の徹底で予防可能な感染症が多い。
展示動物	ヒトにうつる病原体を持つので、ヒトと動物が触れ合える施設では、動物由来感染症に配慮した対策が重要である。

動物由来感染症の病原体

動物由来感染症の原因となる病原体には、大きいものでは数センチ（時には数メートル）もある寄生虫から電子顕微鏡を用いなければ見ることでできないウイルスまで、様々な病原体があります。また、従来の微生物の概念とは異なるプリオンという異常タンパク質も動物由来感染症の原因となることが分かっています。

病原体	引き起こされる感染症の例
ウイルス	狂犬病、日本脳炎、ウエストナイル熱、デング熱、チクングニア熱、ジカウイルス感染症、ダニ媒介脳炎、E型肝炎、重症熱性血小板減少症候群（SFTS）、中東呼吸器症候群（MERS）、重症急性呼吸器症候群（SARS）、エボラ出血熱、Bウイルス病
リケッチア・クラミジア	日本紅斑熱、つづが虫病、オウム病
細菌	Q熱、ペスト、サルモネラ症、レプトスピラ症、パスツレラ症、猫ひっかき病、ブルセラ症、カプノサイトファーガ感染症、コリネバクテリウム・ウルセランス感染症、カンピロバクター症、炭疽、ライム病、鼠咬症、野兎病
真菌	皮膚糸状菌症、クリプトコックス症
寄生虫	トキソプラズマ症、回虫症、エキノコックス症、クリプトスポリジウム症、アニサキス症
プリオン	変異型クロイツフェルト・ヤコブ病（vCJD）

注意を要する感染症（ウシ）



唾液、糞便を介した感染

腸管出血性大腸菌感染症

〈症状〉

- ・腹痛、下痢、嘔吐などの食中毒症状
- ・重症化すると、激しい腹痛と血便を主症状とする出血性大腸炎を呈する
- ・まれに溶血性貧血※、血小板減少及び急性腎不全を3主徴とする溶血性尿毒症症候群（HUS）を併発し、死亡することもある

※ 溶血性貧血：赤血球が破壊されることによっておこる貧血

- 多くのウシから腸管出血性大腸菌が検出されています。
- 動物とふれあった後は、必ず手洗いなどをしましょう。

予防方法

- 動物の糞便を適切に処理する。
- 動物との過剰なふれあいを避ける。
- 動物と接触した際は、手洗いを励行する。



□ : 山口県で陽性が確認されたもの

4 鳥類の調査結果

検査対象		感染症名	検査方法	実施年度	陽性/ 検査件数	検出率 %
鳥 類 ※	糞便	サルモネラ症	細菌培養	H21～22	0/ 98	0.0%
		オウム病	抗原検出	H16～18	26/132	19.7%
			病原体遺伝子 検出	H16～20 H29～R5	5/226 3/294	2.2% 1.0%
		クリプトコッカス症	病原体検出	H23～24	20/ 97	20.6%
		エルシニア感染症	病原体検出	H25	2/ 50	4.0%
		カンピロバクター症	病原体検出	H27～R1	22/230	9.6%

※ オウム目、スズメ目、ハト目及びキジ目の鳥類

動物由来感染症に特に注意を要する人

以下に挙げる人は、感染のリスクが高かったり、感染した場合重症化しやすいなどの理由により、より一層の注意が必要です。

- 妊婦
- 免疫機能低下者（糖尿病患者、慢性腎疾患患者、進行性肝疾患患者、H I V感染者、免疫抑制剤服用者など）
- 5歳以下の乳幼児（監督者による十分な注意が必要）
- 知的障がい有する人（監督者による十分な注意が必要）
- 高齢者



注意を要する感染症（鳥類）



濃厚接触による感染

鳥インフルエンザ

〈感染経路〉

- ・感染した鳥やその排泄物、死体、臓器等に濃厚接触することによって感染することがある

〈症状〉

- ・発熱、呼吸器症状（肺炎）
- ・多臓器不全で死亡することがある

エルシニア感染症

〈症状〉

- ・腹痛、下痢、発熱などの食中毒症状
- ・時に、結節性紅斑※2、関節炎、咽頭炎、心筋炎、髄膜炎及び敗血症※3など多彩な症状を呈することがある

カンピロバクター症

〈症状〉

- ・腹痛、下痢、発熱などの食中毒症状
- ・回復後、まれにギラン・バレー症候群※4を発症

※1 日和見感染：免疫力が弱ったため、通常は病原性を示さない病原体が感染し、発症すること

※2 結節性紅斑：皮膚の下に圧痛を伴う赤い隆起（結節）ができる炎症性の病気

※3 敗血症：血液中に病原体が入り込み、重篤な全身症状を引き起こす病気

※4 ギラン・バレー症候群：筋肉を動かす運動神経が侵され、急に手足に力が入らなくなる病気

糞便を介した感染

（乾燥糞が飛散した塵埃の吸入等による。）

オウム病

〈症状〉

- ・日和見感染※1が多い
- ・免疫不全状態にある場合は、容易に発症し、呼吸器症状、神経症状、皮膚症状及び眼症状を呈する
- ・重症化すると、髄膜炎などの重篤な症状を呈し、死亡することもある
- ・日本でも妊婦が感染し、死亡した例がある

クリプトコッカス症

〈症状〉

- ・発熱、発咳（痰を伴う）、全身倦怠感、食欲不振、筋肉痛、頭痛等のインフルエンザ様症状を呈する
- ・重症化すると、呼吸困難、意識障害により死亡することもある

予防方法

- 鳥類の適正飼養管理を実施する。（乾燥糞の適正処理等）
- 糞を処理するときは、マスクなどで飛散した塵埃を吸入しないように気を付ける。
- 室内で飼育する場合は、ケージや室内をこまめに清掃し、定期的に換気する。
- 口移しで餌を与えたり、食器を共用するなど、鳥類との過剰なふれあいを避ける。
- 鳥類と接触した際には、手洗いを励行する。



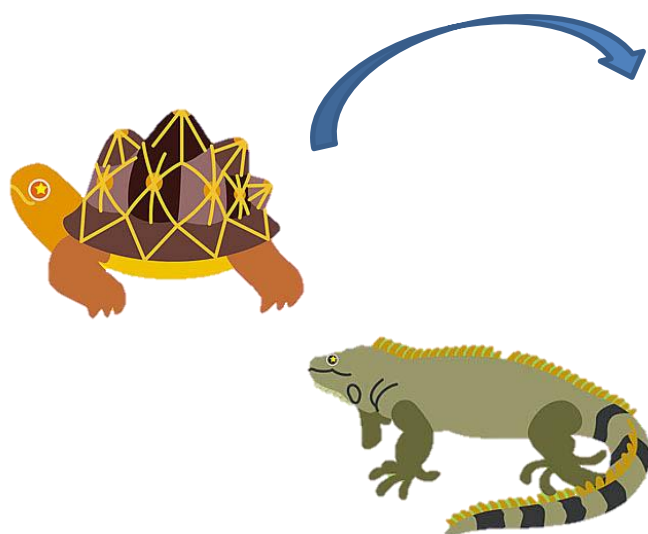
□ : 山口県で陽性が確認されたもの

5 は虫類の調査結果

検査対象		感染症名	検査方法	実施年度	陽性/ 検査件数	検出率%
は虫類 ※	糞便	サルモネラ症	細菌培養 薬剤感受性 試験	H20～22	41/65	63.1%
	飼育水		細菌培養 薬剤感受性 試験	H20～22	29/74	39.2%

※ カメ、ヤモリ、ヘビ及びトカゲ等

注意を要する感染症（は虫類）



糞便を介した感染

サルモネラ症

〈症状〉

- ・腹痛、下痢、嘔吐などの食中毒症状
- ・まれに、高熱、頭痛、意識低下、けいれん等の重篤な症状を呈することがある

予防方法

- 動物の糞便を適切に処理する。
- 口移しで餌を与えたり、食器を共用するなど、動物との過剰なふれあいを避ける。
- 動物と接触した際には、手洗いを励行する。
- 特にカメなどの適正飼養管理を実施する。（水槽の水換えの際の衛生管理等）

□ : 山口県で陽性が確認されたもの

6 げっ歯類等の調査結果

検査対象		感染症名	検査方法	実施年度	陽性/ 検査件数	検出率%
げ っ 歯 類 等 ※	糞便	エルシニア感染症	病原体分離	H24～26	5/151	3.3%
		サルモネラ症	病原体分離	H25～26	0/50	0.0%
	尿	レプトスピラ症	遺伝子検出	H27～29	0/95	0.0%

※ ネズミ目及びウサギ目に属する動物（ネズミ、ハムスター、リス等）

注意を要する感染症（げっ歯類等）



糞便を介した感染

エルシニア感染症

〈症状〉

- ・腹痛、下痢、嘔吐などの食中毒症状
- ・時に、結節性紅斑^{※1}、関節炎、咽頭炎、心筋炎、髄膜炎及び敗血症^{※2}など多彩な症状を呈することがある

尿を介した感染

レプトスピラ症

〈症状〉

- ・38～40℃の発熱、悪寒、頭痛、筋肉痛等
- ・重症の場合は、発症後5～8日目に黄疸、出血、腎機能障害等が現れる

- ※1 結節性紅斑：皮膚の下に圧痛を伴う赤い隆起（結節）ができる炎症性の病気
 ※2 敗血症：血液中に病原体が入り込み、重篤な全身症状を引き起こす病気

予防方法

- 動物の糞便を適切に処理する。
- 口移しで餌を与えたり、食器を共用するなど、動物との過剰なふれあいを避ける。
- 動物と接触した際には、手洗いを励行する。

□ : 山口県で陽性が確認されたもの

7 ふれあい動物^{※1}の調査結果

検査対象		感染症名	検査方法	実施年度	陽性/ 検査件数	検出率 %
大型動物 ※2	糞便	サルモネラ症	細菌培養	H25～26	5/39	12.8%
	口腔		細菌培養		2/39	5.1%
	糞便	腸管出血性大腸菌感染症	細菌培養	H25～30	50/118	42.4%
	口腔		細菌培養		4/118	3.4%
	糞便	クリプトスポリジウム症	病原体検出	H26～27	0/59	0.0%
	糞便	ジアルジア症	病原体検出	H26～27	0/59	0.0%
小型動物 ※3	尿	レプトスピラ症	遺伝子検出	H28～30	0/82	0.0%

※1 ふれあい体験実施施設で飼養されている動物

※2 ふれあい動物のうち、ウシ、ヤギ、ヒツジ等の動物

※3 ふれあい動物のうち、ウサギ、モルモット等の動物

日本であったこんな話

狂犬病

海外でイヌに咬まれて感染したヒトが、日本に帰国・入国後、発症して死亡

日本紅斑熱

マダニに咬まれて発症。温暖な西日本に多く、春と秋が発生のピーク

オウム病

展示施設の従業員や来場者で集団発生。換気口内で乾燥した汚染ハト糞が施設屋内に飛散して集団感染。

重症熱性血小板減少症候群（SFTS）

発症したイヌ、ネコから飼主や獣医師が感染発症して弱った野良ネコからの感染もある

レプトスピラ症

感染ネズミの尿で汚染された池や川で水遊びをして感染し、発熱

エキノコックス症

感染 20 年後に肝臓癌と間違われて感染発覚

腸管出血性大腸菌感染症

ふれあい動物施設の来場者が集団感染

サルモネラ症

ペットのミドリガメやイグアナ等のは虫類から子供が感染し、重症に

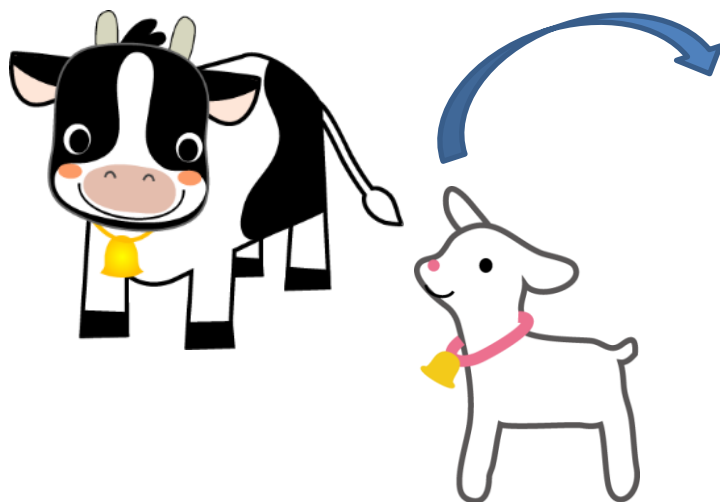
Q熱、パステラ症、猫ひっかき病、カプトサイトファーガ感染症、コリネバクテリウム・ウルセランス感染症

イヌ、ネコがふつうに持っている病原体で、過度の密接な接触によって感染

結核

動物園のサルが感染し、安楽死処分飼主からペットのイヌが感染したケースも

注意を要する感染症（ふれあい動物：ウシ、ヤギ、ヒツジ）



唾液、糞便を介した感染

サルモネラ症

〈症状〉

- ・腹痛、下痢、嘔吐などの食中毒症状
- ・まれに、高熱、頭痛、意識低下、けいれん等の重篤な症状を呈することがある

腸管出血性大腸菌感染症

〈症状〉

- ・腹痛、下痢、嘔吐などの食中毒症状
- ・重症化すると、激しい腹痛と血便を主症状とする出血性大腸炎を呈する
- ・まれに溶血性貧血、血小板減少及び急性腎不全を3主徴とする溶血性尿毒症症候群（HUS）を併発し、死亡することもある

- 多くのふれあい動物から腸管出血性大腸菌が検出されています。

動物とふれあった後は、必ず手洗いなどをしましょう。

予防方法

- 動物の糞便を適切に処理する。
- 動物との過剰なふれあいを避ける。
- 動物と接触した際には、手洗いを励行する。
- 幼児等が動物に接触する場合は、監督者による監督のもとで行わせる。



コラム

酪農体験イベントで発生した 0157 の集団感染

2009年9月、酪農関係団体が主催する消費者交流イベントの参加者から 0157 患者が発生しています。患者は、いずれもふれあい体験に参加しており、会場内の子牛にふれた手を介して経口感染したと見られています。

動物にふれた後は、必ず手洗いをして感染予防に努めましょう。

Ⅲ 動物由来感染症の予防対策

日常生活で注意すること

イヌの登録と予防注射等

飼主には狂犬病予防法で飼犬の登録と毎年
の狂犬病予防注射、鑑札と注射済票の装着が
義務付けられています。



過剰なふれあいは控えましょう

細菌やウイルス等が動物の口の中にあるこ
とがあるので、口移しで餌を与えたり、スプ
ーンや箸の共用は止めましょう。動物との入
浴や布団に入れて寝ることも、濃厚接触とな
るので止めましょう。

動物にさわったら、必ず手洗い等をしましょう

動物は、自身には病気を起こさなくても、ヒトに病気を起こす
病原体を持っていたり、動物の毛にカビの菌糸や寄生虫の卵
等がついていることがあります。また、動物やその唾液にふれ
た手で、知らないうちに自分の目や口、傷口等をさわってしま
うこともあるので、動物にふれたら必ず流水で手洗い等をし
ましょう。その他、動物から排せつされた糞などから病原体を
吸い込むこともあるので、注意が必要です。



動物の身の回りは 清潔にしましょう

飼っている動物はブラッシング、つめ切り
等、こまめに手入れをするとともに寝床も
清潔にしておきましょう。小屋や鳥かご等
はよく掃除をして清潔に保ちましょう。タ
オルや敷物、水槽等は細菌が繁殖しやすい
ので、こまめな洗浄が必要です。

砂場や公園で遊んだら 必ず手を洗いましょう

動物が排せつを行いがちな砂場や公園は注意
が必要です。特に子供の砂遊び、ガーデニング
で草むしりや土いじりをした後は、十分に手
を洗いましょう。また、糞を見つけたら速やか
に処理しましょう。

糞尿は速やかに処理しましょう

糞尿で病原体が増殖したり、糞尿が乾燥して
中の病原体が空気中を漂うことがあります。
糞尿に直接ふれたり病原体を吸い込んだり
しないよう気を付け、早く処理しましょう。

室内で鳥を飼育する時は 換気を心がけましょう

羽毛や乾燥した排せつ物、塵埃等が室内に充満
しやすくなります。ケージや室内のこまめな清
掃のほか、定期的な換気に努めましょう。

野生動物の肉（ジビエ）の 生食は避けましょう

シカ、イノシシなどの野生動物の肉は生または加熱不十分な状態で食べると、E型肝炎や腸管出血性大腸菌感染症、寄生虫などの食中毒リスクがあります。ジビエは中心部まで火が通るようしっかり加熱して食べましょう。

野生動物の家庭での飼育や 野外での接触は避けましょう

野良イヌ、野良ネコや野生動物はどのような病原体を保有しているかわかりません。安易にさわらないようにしましょう。また、野生動物保護の観点からも、野生動物の飼育を避けましょう。

野鳥が死んでいるのを見つけたら ～マスクと手袋を着けて取扱いましょう～

野鳥も飼われている鳥と同じように、様々な原因で死亡します。飼われている鳥と違ってエサが取れずに衰弱したり、環境の変化に耐えられずに死んでしまうこともあります。

また、野鳥は、鳥インフルエンザウイルス以外にも様々な細菌や寄生虫を持っていたりします。野鳥が死んだ場合には、こうした細菌や寄生虫などがヒトの体に感染することを防止することが重要です。

死亡した野鳥を取扱うときは、素手でさわらず、マスクと手袋を着けてからビニール袋に入れ、処分しましょう。

ダニに注意しましょう

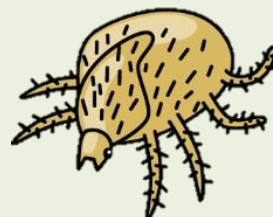
ダニに咬まれないため

ダニ（マダニ類、ツツガムシ類）は、山林、草地などに生息している他、公園、住宅地の庭などでも注意が必要です。特に春から秋にかけて活動が活発になります。ダニの生息する場所に入る場合には、長袖、長ズボン、足を完全に覆う靴下、靴、帽子、手袋を着用し、首にタオルを巻く等、なるべく肌を露出しないようにしましょう。また、忌避剤はジエチルトルアミド（ディート）が含まれる薬剤が有効とされています。



もし、ダニが吸着していたら・・・

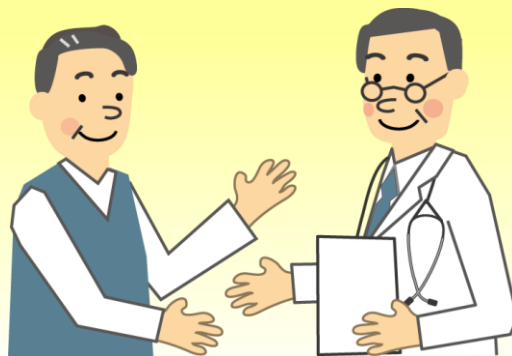
- ①放置すると数日間以上吸着し続けますので、見つけたら早めに取り除くことが肝心です。
- ②できるだけ医療機関（皮膚科）を受診し、処置してもらってください。
- ③咬まれてからしばらくして（数日～2週間程度）発熱・発疹などの症状が出た場合には、医療機関を受診し、ダニに咬まれたことを告げてください。



早めに医療機関を受診しましょう

体に不調を感じたら、早めに受診を！

動物由来感染症に感染しても、かぜやインフルエンザ、ありふれた皮膚病等に似た症状のことも多く、病気の発見が遅れがちです。特に小さな子供や高齢者はいったん発病すると重症化しやすいので、注意が必要です。医療機関を受診する際は、ペットの飼育状況やペットの健康状況、また動物との接触状況等についても医師に伝えましょう。



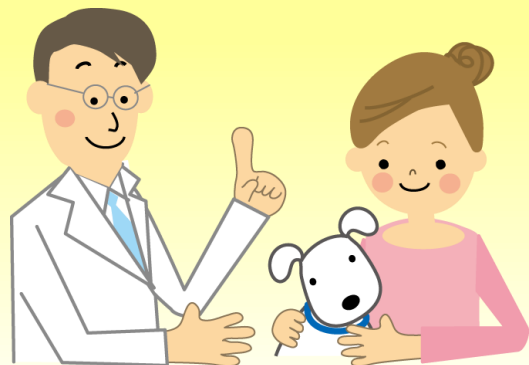
ペットの健康状態に注意しましょう

動物（ペット）も定期検診で病気の早期発見を！

動物由来感染症の病原体に感染しても、動物は軽い症状や無症状のこともあるため、知らないうちに飼主が感染してしまう場合があります。また、ペットに寄生するノミやマダニが病原体を媒介することがあるので、定期的な駆除とペットに定期検診を受けさせるなど、日常の健康管理に注意し、病気を早めに見つけましょう。また、ペットが病気と診断された場合、ヒトにうつる可能性があるか否かを獣医師に確認し、対応を聞きましょう。

かかりつけの動物病院で相談！

ペットにもかかりつけ動物病院を作り、相談できる関係づくりが大切です。飼い方、病気の予防や対応、予防注射等の相談ができると安心です。まず、自分の身近な動物から感染のおそれのある感染症について、知識を持つことが大切です。



IV 主な動物由来感染症

1 ペット動物等からヒトに感染する（又は感染の疑いがある）病気

狂犬病

●病気の特徴（症状）

通常1～3か月の潜伏期間※の後に発症。初期は風邪に似た症状や、咬まれた部位の知覚異常がみられる。不安感、恐水症、興奮、麻痺、錯乱等の神経症状が現れ、数日後に呼吸麻痺で死亡する。発症するとほぼ100%死亡する。

●感染経路・感染状況

発症したイヌ、ネコ、アライグマ、キツネ、スカンク、コウモリ等に咬まれる等唾液中のウイルスが体内に侵入することにより感染する。日本では1957年を最後に発生はないが、2006年、海外でイヌに咬まれて感染し、帰国後に発症して死亡した方が2人、また、2020年、海外からの入国後に発症して死亡した方が1人確認されている。世界のほとんどの地域で発生しており、狂犬病による死者は年間6万人といわれている。特にアジアとアフリカでの発生が多い。

●予防

- ・海外ではむやみに動物にさわらない。
- ・渡航先で狂犬病のおそれのあるイヌ等に咬まれたら、すぐに傷口を石けんときれいな水でよく洗い、速やかに医療機関で傷の処置と治療、狂犬病ワクチンの接種等を受ける。
- ・狂犬病の流行国でイヌに接する機会がある場合や近くに医療機関がない地域に長期滞在する場合は、渡航前にワクチンを受けておくことよい。



※ 潜伏期間：病原体に感染してから、症状が出るまでの期間

鳥インフルエンザ

●病気の特徴（症状）

鶏、七面鳥、ウズラ等が高病原性の鳥インフルエンザウイルスに感染すると、全身症状を示して死亡する割合が高くなる。ヒトの症状の多くは、発熱、呼吸器症状（肺炎）であるが、多臓器不全で死に至る場合もある。

●感染経路・感染状況

ヒトは感染した鳥やその排せつ物、死体、臓器等に濃厚に接触することによって感染することがある。H5N1 亜型の感染はアジア・アフリカ等で、H7N9 亜型は中国で発生が確認されており、ヒトの感染もおきている。日本では発症したヒトは確認されていない。自然界では、渡りをする野生の水きん類（カモ等）がウイルスを保有している場合がある。死亡した鳥類等との接触には注意する必要がある。

●予防

- ・海外ではヒトの感染事例が報告されていることから、海外の流行地域では、弱った鳥や死んだ鳥にむやみに近づかない、さわらない。（特に流行地の養鶏場や市場等の生きた鳥を扱っている場所には近づかない。）
- ・国内で発生があった場合、防疫作業に従事する者等は徹底した感染防御と健康管理を行う。



● 病気の特徴（症状）

5～14日の潜伏期間※の後に、38～40℃の発熱、悪寒、頭痛、筋肉痛、結膜充血等の初期症状が現れる。重症の場合は、発症後5～8日目に黄疸、出血、腎機能障害等の症状が現れる。

● 感染経路・感染状況

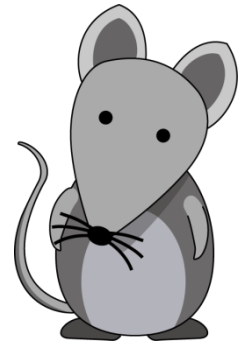
保菌動物（イヌ、ネズミ等）の尿中に菌が排出される。感染動物の尿や尿に汚染された水や土等から皮膚や口を介して感染する。全国で散発的に発生し、地域によっては集団発生も報告されている。

山口県においても飼犬への感染が確認されている。

● 予防

- ・ネズミの駆除等のレプトスピラ保菌動物への対策や衛生環境の改善。
- ・感染の可能性のある動物と接触する場合はゴム手袋やゴーグル等を着用する。
- ・飼犬へのワクチン接種や定期的な健康診断の実施。

※ 潜伏期間：病原体に感染してから、症状が出るまでの期間



● 病気の特徴（症状）

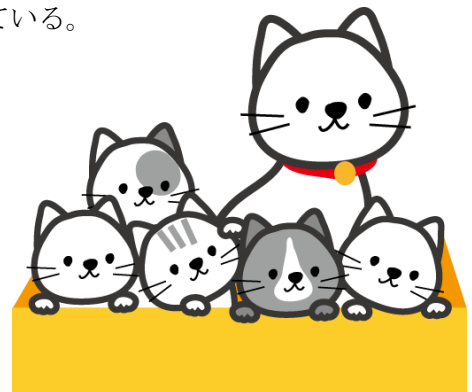
感染初期は発熱、鼻水等の風邪に似た症状で、その後、咽頭痛や咳が始まり、ジフテリア※と同様の症状を示す。2016年には本菌の感染による死亡例も発生している。

● 感染経路・感染状況

本菌に感染したイヌやネコとの接触や飛沫により感染する。海外では、イヌやネコ以外にもウシ等の家畜との接触や、殺菌されていない生乳の摂取による感染報告もある。

● 予防

- ・成人用ジフテリアトキソイドやDPT-IPV（ジフテリア、百日咳、破傷風、不活化ポリオ）四種混合ワクチンが感染防御に効果があるとされている。
- ・くしゃみや鼻水等の風邪様の症状や皮膚病を呈している動物との接触を控え、動物とふれあった後は、手洗い等を行う。



※ ジフテリア：ジフテリア菌の感染により発症する上気道粘膜疾患。発熱、咽頭痛等からはじまり、血液の混じった鼻水、鼻孔・上唇のびらん、扁桃・咽頭周辺の偽膜形成がみられる。合併症として心筋炎、神経麻痺があり、死亡することもある。

●病気の特徴（症状）

6日～2週間の潜伏期間※の後に、発熱、全身倦怠感、消化器症状が現れ、時に意識障害などの神経症状や出血症状が現れる。重症化し、死亡することがある。特に高齢者で重症化しやすい。

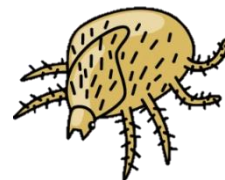
●感染経路・感染状況

主にSFTSウイルスを保有したマダニに咬まれて感染する。西日本で患者報告が多く、春から秋にかけて患者発生が多い。また発症したイヌやネコの体液からも感染することが報告されている。特にネコは発症したときの症状が強く、感染したネコから咬傷や接触による飼主や動物病院従事者の感染例も報告されている。日本国内では複数のマダニ種からSFTSウイルスの遺伝子が検出されている。

なお、マダニは、食品等に発生するコナダニや寝具に発生するヒョウヒダニなど、家庭内に生息するダニとは全く種類が異なる。

●予防

- ・マダニに咬まれないように、草むらや藪など、マダニが多く生息する場所に入る場合には、肌を露出しない服装を着用し、虫除けスプレー等を使用する。
- ・屋外活動後はダニに咬まれていないかを確認する。
- ・ペット（イヌやネコ）のマダニ予防、駆除を行い、動物が体調不良の際には、動物病院を受診する。
- ・むやみに弱った野生動物に手を出さない。



※ 潜伏期間：病原体に感染してから、症状が出るまでの期間

コラム

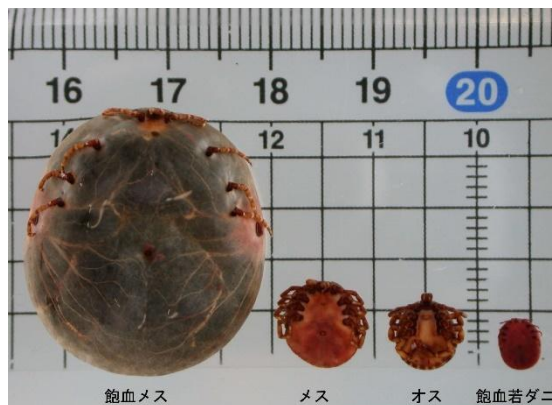
SFTS患者の飼犬からウイルスを検出

2014年に、マダニが媒介する重症熱性血小板減少症候群（SFTS）を発症した愛媛県の男性には、ダニに咬まれた痕跡がありませんでしたが、飼育しているイヌに付いていたマダニを素手で取って潰したことがあり、血液検査の結果、このイヌからSFTSウイルスが検出されています。

また、近年、SFTSウイルスに感染し、発症している動物の血液などの体液に直接ふれ、同ウイルスに感染した事例が報告されていますが、健康なイヌやネコ、屋内のみで飼育されているイヌやネコからヒトが同ウイルスに感染した事例は、これまでに報告がありません。

○イヌやネコなどの飼主の方は、次の注意が必要です。

- ・ペットを家に入れるときは、マダニが付いていないかブラッシングなどをして確認すること
- ・ペットとマダニの接触する機会を減らすため、できる限り屋内飼育すること
- ・ペットにマダニを寄せ付けないようにする薬剤等があるので、獣医師に相談すること



タカサゴキラマダニ

写真提供 国立大学法人山口大学共同獣医学部
（山口県感染症情報センターから引用）

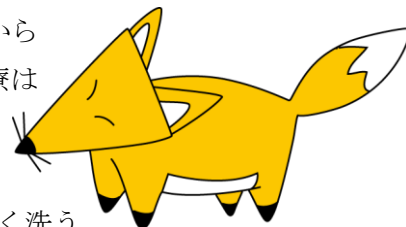
●病気の特徴（症状）

エキノコックス条虫の虫卵が口から入ることで感染する。感染した虫卵は腸の中で幼虫になり、その後肝臓で発育・増殖する。感染後、数年から十数年ほどたって自覚症状が現れる。初期には上腹部の不快感・膨満感、さらに進行すると肝機能障害を起こす。

●感染経路・感染状況

日本では、北海道のキタキツネが主な感染源で、糞中に病原体であるエキノコックスの虫卵を排出する。北海道で放し飼いをしているイヌもキタキツネ同様に感染源となる。

ヒトはエキノコックスの虫卵が手指、食物や水等を介して口から入ることで感染する。ヒトは血清等で検査可能であるが、治療は外科手術が必要となる。イヌは糞便で虫卵の検査が可能。



●予防

- ・キタキツネ等との接触をできるだけ避け、外出後は手をよく洗う。
- ・キツネを人家に近づけないよう、生ごみ等を放置せず、餌を与えたりしない。
- ・沢や川の生水は煮沸してから飲むようにする。
- ・山菜や野菜、果物等もよく洗ってから食べる。
- ・イヌも感染した野ネズミを食べて感染するため、放し飼いをしない。

2 節足動物等※からヒトに感染する（又は感染の疑いがある）病気

※ 昆虫類、ノミ、ダニ等

●病気の特徴（症状）

多くのヒトは感染しても症状が出ないが、100 人から 1,000 人に 1 人の割合で発病すると言われている。

発病すると急性脳炎を起こし、死亡することがある。

また、症状は治まっても後遺症を残すことが多い。

●感染経路・感染状況

ウイルスはブタの体内で増殖し、蚊によってブタからブタに伝播する。

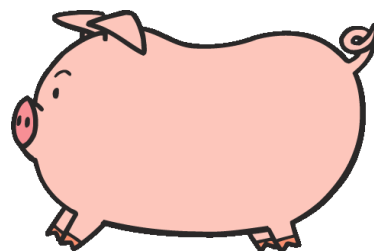
ヒトは、感染したブタを刺した蚊（主にコガタアカイエカ）に吸血されて感染する。

ヒトからヒトへの直接感染はない。

近年の発生数は毎年 10 人以下であるが、厚生労働省の調査によると、毎夏日本脳炎ウイルスを保有した蚊は発生しており、国内でも感染の機会はなくなっていない。また、以前は見られなかった若年の患者が発生していることも注目されている。

●予防

- ・不活化ワクチンの接種が最も有効である。市町の案内に従って正しく接種する。
- ・蚊の発生の多い水田地帯やブタなどを飼育している地域では、虫よけスプレーや蚊取り線香などを利用し、肌を露出しない服装を心がける。



●病気の特徴（症状）

1週間から4週間の潜伏期間※をおいて、発熱、寒気、頭痛、嘔吐、関節痛、筋肉痛などの症状が出る。マラリアの中でも熱帯熱マラリアは短期間で重症化し、死亡する危険があるため、特に注意が必要。

●感染経路・感染状況

マラリア原虫を持った蚊（ハマダラカ属）に刺されることで感染する。

世界中の熱帯・亜熱帯地域で流行しており、日本でも年間に60人前後が海外で感染し、国内で発症している。

●予防

- ・マラリアの流行地域では、虫よけスプレーや蚊取り線香などを利用し、肌を露出しない服装を心がける。
- ・マラリアには予防薬がある。マラリアの流行地域に渡航する際は、抗マラリア薬の予防内服が望ましいとされている。

※ 潜伏期間：病原体に感染してから、症状が出るまでの期間

●病気の特徴（症状）

3つの感染症は、発熱、発疹、結膜炎、筋肉痛、倦怠感、頭痛など似た症状が現れる。

デング熱は、重症化すると出血やショックが見られ、死亡することもある。

チクングニア熱では、手足の関節痛が多くの患者で認められるが、急性症状が回復した後も数週間から数か月にわたり症状が続く場合がある。

ジカウイルス病は、デング熱やチクングニア熱に比べ症状は一般的に軽いが、妊娠中の女性がウイルスに感染すると、胎児の小頭症やギラン・バレー症候群との関連性が強く示唆されている。

●感染経路・感染状況

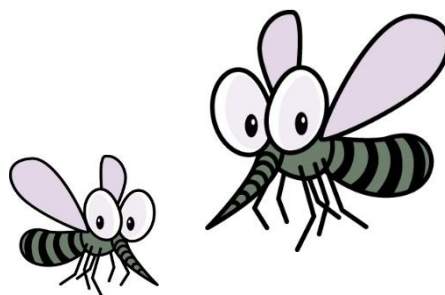
ウイルスを保有する蚊（ヤブ蚊）に刺されることで感染する。

中南米やアフリカ、東南アジアなどの熱帯・亜熱帯地域で流行している。

日本でも海外で感染したヒトが国内で発症した事例（輸入感染）が報告されている。

●予防

- ・長袖・長ズボンの着用や昆虫忌避剤の使用など、蚊に刺されない工夫が必要。
- ・デング熱は再感染時に重症化のリスクが高くなることから、過去に感染歴を持つ者は特に注意を要する。



正しい手洗い方法

1



流水で汚れを簡単に
洗い流す

2



石けんをつけて十分に
泡立てる

3



手のひらを合わせて
よく洗う

4



手の甲を伸ばすように
洗う

5



指先、爪の間をよく洗う

6



指の間を十分に洗う

7



親指と手のひらをねじり
洗いをする

8



流水で石けんと汚れを
十分に洗い流す

手洗いの後はペーパー
タオル等で水分をふき
とり、消毒薬があれば手
に取り、よくすりこみま
しょう

